吉田玉女 改め
二代目吉田玉男さんに聞く

文楽界の至宝・初代吉田玉男さん（人形遣い・人間国宝）が亡くなって9年目の今年4月、一番弟子の玉女さん（61）が、二代目吉田玉男を襲名した。先代の足遣い、左遣いを長年勤め、文字通り間近で師匠の芸を学んだ玉男さんに、襲名への思いや修業時代の思い出などを伺った。

襲名を決心されたきっかけは？

師匠の三回忌が済んだ頃、先輩方から襲名の話がありました。しかし自分には畏れ多いことで、50代ではまだ早いと思っていたんです。そうして平成25年に還暦を迎えた私は、その年の東京公演で「伊賀越道中双六（いがごえどうちゅうすごろく）」の大役・唐木政右衛門（からきまさえもん）を遣いました。これを長年文楽の舞台を観ていただいている長唄の稀音家義丸（きねやよしまる）先生がご覧になり、「もう二代目玉男を襲名してもいいのではないか」といってくださいました。こうしたことがあって、ご遺族のお許しを得て師匠の名前を継ぐ覚悟を決めました。

襲名披露狂言で感じられたことは？

大阪（4月・国立文楽劇場）、東京（5月・国立劇場）ともに、連日大入りのお客様にご来場いただき、とてもうれしく思っています。先代のことは皆さんよくご記憶ですから、私の襲名に高い関心を持っていただき、テレビや新聞などで紹介されたことも集客につながったと思います。襲名披露口上は、歌舞伎と違って私は言葉を発しないのですが、お客様の視線が押し寄せてくるようでとても緊張しました。また、同期入門の桐竹勘十郎さんが、中学生で入門した当時の私との思い出を口上され、私は胸が熱くなりました。2か月にわたる襲名披露狂言は、あっという間に過ぎたという印象です。

「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）」を襲名披露の演目にされたのはどうして？

入門して13年目の昭和55年、師匠の足遣いをしていた私は、若手向上会で「一谷嫩軍記」の主役・熊谷次郎直実（くまがえのじろうなおざね）の主遣いを初めて勤めました。このとき師匠には左遣いをしていただきました。熊谷役は師匠も好きでしたし、勉強会とはいえ私が初めて主役を遣ったのが熊谷です。そのため師匠を偲び、初心に返って精進する思いを込めて、襲名披露狂言の演目に選びました。

襲名披露狂言で「一谷嫩軍記」の熊谷次郎直実を遣う（4月・国立文楽劇場）
（写真提供：国立文楽劇場）

師匠から教わったことで印象深いことは？

文楽の人形遣いは、「足10年、左15年」といわれるほど長く修業をします。師匠は立役（男役）であまり動かない役が多く、足遣いで修業中の私は、じっと動かず我慢しているのが不満でした。一方、勘十郎（当時吉田簑太郎）さんは、よく動く人形の足を遣っていて、私は羨ましく思っていました。そんな私に師匠は、「じっとしているときに浄瑠璃を聞いたり、主遣いを見たり、芝居全体を見ることが大事や。そうすれば動く足もできるようになる」と諭してくださいました。まだ10代の私は、我慢することの意味がわからなかったんですね。ふくれっ面になり、それでまた叱られることもありました。

文楽協会への補助金削減問題や今後の活動について

大阪市から（平成25年度から入場者数によっては）補助金を出さないといわれて、とても驚きました。反面、皮肉にもこの問題が引き金となって、文楽が再び注目されました。今年は、将来の観客となる大学生向けの「ワンコイン文楽」を関西・大阪21世紀協会の「アーツサポート関西」にご支援いただいたり、若手が中心となった「うめだ文楽」に民間放送局のご支援をいただき、とても感謝しています。また、来年は国立劇場（東京）が開場50周年を迎えます。さらには東京オリンピックなどの機会を得て、私たちは文楽のアピールに一層努めていきたいと思っています。

（聞き手 ライター 三上祥弘）

二代目 吉田玉男

昭和28年大阪府八尾市生まれ。昭和43年、初代吉田玉男に入門、吉田玉女と名乗る。昭和44年、大阪・朝日座で初舞台。師匠が得意とした線の太い立役の多くを受け継ぐ。第32回（平成24年度）国立劇場文楽賞文楽大賞、平成25年度（第70回）日本芸術院賞ほか受賞多数。共著「文楽へようこそ（平成26年）」。